

きべりはむし

第15巻 第1号

目 次

ダイコクコガネについて	高橋 寿郎	1
兵庫県のベニボタル(3)	高橋 寿郎	8
ハラグロオオテントウの生活史	東 正雄	15
兵庫県産珍稀な蛾類の追加	東 正雄	16
宝塚大橋の照明燈で採集した蛾(続報その7)	新家 勝	19
神戸市北区山田町(鈴蘭台周辺)の蛾	松本 健嗣	21
宝塚市清荒神のチョウ(追録6)	加藤信一郎	22
兵庫県で採集したエンマムシの記録	沢田 和宏	23
西宮市でネプトクワガタを採集	田中 稔	25
アオドウガネの食草についての報告(続報その2)	新家 勝	25
宝塚市とその付近におけるヒラタアオコガネの採集記録	新家 勝	25
ツマアカマルハナノミダマシの記録	高橋 寿郎	26
トウヨウダナエテントウダマシ三木市口吉川にて採集	高橋 寿郎	27
ラミーカミキリ豊岡市上佐野に多産	高橋 寿郎	28

会 員 異 動

兵 庫 昆 虫 同 好 会

1987年5月

ダイコクコガネについて*

高橋 寿郎

ダイコクコガネ *Copris ochus* (Motschulsky) は黒いがやや光沢があり♂は頭に強壯で湾曲した長角を有し(個体によっては変化がある), 仲々勇壮な虫なのである。大きさもそれ程小さくはない(体長18~28mm)。日本全国に分布していて大陸にもいる。明治時代の神戸市内ではたくさんいたらしい, 少なくとも戦前では稀ながら見ることが出来た。開発, 都市化, 農村の機械化とこの虫の生活も次第に追いつめられている。不思議にも近畿地方では兵庫県以外ではほとんど知られていない虫でもある(大阪府箕面の記録はあるが現在は見られないのではないだろうか)。この種もやはり絶滅に追い打ちをかけられている虫の1つかもしれない。そこで分布を中心としてこの虫に関する雑文を書いて見た(因にダイコクコガネの学名はギリシャ語のウシのふん=コプロスを選ぶもの=オコースと言う意味であることを蛇足までに)。

ダイコクコガネは1860年V. de Motschulsky (Victor Ivanovich de Motschulsky 1810-1871) が "Insectes du Japon" (Etudes entomologiques, tome 9, p.4-39) なる論文を発表そのp.13-14に *Cantharsius Ochus* Motsch. と記載された種である。Motschulsky は日本の昆虫に関する重要な論文を4篇発表していてこの論文は2番目の論文になる。箱館駐在のロシア領事Goschkevitchの夫人の採集品の目録で鞘翅目及び鱗翅目の多数が記録されている。主として箱館産のものようであるが一部下田又は江戸で採集されたと思われるものもふくまれている。このダイコクコガネも産地を明記していないが箱館産であったのではないかと考えられる。

1875年にはChas. O. Waterhouse がGeorge Lewisが主として南日本で採集したコガネムシを主体に "On the Lamellicorn Coleoptera of Japan" (Trans. ent. Soc. Lond. Part. I, p.71-116, pl. III) なる論文を発表されそのp.73-74で本種を記録され "Shimabara and Hiogo, and other sandy districts in Kiushiu and Nipon. Very abundant" と記している (*Cantharsius* 属)。

1879年L. v. Heydenはプロシヤ公使館顧問として東京に滞在(1874-1875)したDr. Reinがその期間中日本各地を主として甲虫を採集して持ち帰ったものに基づいて "Die Coleopterologische Ausbeute des Prof. Dr. Rein in Japan 1874-1875" (Deut. ent. Zeit. X X III, Heft. II: 321-365) なる論文を発表そのp.339に *Cantharsius Ochus* Motsch. 1♂をInsel Kiushiuから記録している。同じ年のG. LewisがLondonで発表した "A Catalogue of Coleoptera from the Japan Archipelago" のp. 13, No. 889に *Cantharsius ochus* Motsch. と記録している。

*兵庫県甲虫相資料・189

Dr. C. Gottsche が1883年と1884年に朝鮮で採集をした結果をもとに Kolbe, H. J. が1886年朝鮮産の甲虫相をまとめた報文を発表 (Arch. f. Naturg. 52: 139-240), 多くの新種記載もされた。Gottsche 自身日本でも採集しているので日本産に就いても言及された箇所がある。p. 186 に *Copris Ochus Mots.* として Söul で1883年8月に採集したとダイコクコガネを記録している。

1887年の Schönfeldt の日本産甲虫目録 (Jahrb. d. nass. Ver. f. Naturhunde, 40: 31-204) の p. 103 に *Cantharsius Ochus Motsch.*, Shimabara, Hiogo, Kiushiu, Nippon が記録されている。

1888年 J. H. Leech が朝鮮半島の東側を主として蝶蛾の採集に出掛けた時得た甲虫 (元山, 釜山付近産が多い) の内オサムシ, コガネムシ, カミキリムシ 92種の記録を H. W. Bates は発表した (Proc. Zool. Soc. London X X VI: 367-380)。この p. 371 に *Copris ochus, Motsch.* を記録している。何処で採集したとは記されていないが日本では普通の虫であると言っている。

1892年に Reitter E. が発表した "旧北区の食蕨コガネムシの検索表" (Verh. Naturforsch. Ver. Brüm. 30: 1-109) の中で p. 216 に *Copris Ochus Motsch.* の分布は Suifun, Mongolei, China, Japan となっている。

1893年には Lewis が自身の発表した「日本の甲虫目録」(1879) についてのシノニムの整理とか日本産新記録甲虫とかを取りまとめた論文 "A List of Coleoptera new to the Fauna of Japan, with Notices of Unrecorded Synonyms" (Entomologist, 26: 150-153) を発表した。その p. 150 に *Cantharsius ochus Motsch. = Copris ochus* として本種は真の *Copris* 属の種で *Motschulsky* は属を間違っていると記している。本種を *Copris* に扱っているものはこれまでも割合あるがその取扱いに就いて言及したのはこの報文が始めてではないだろうか。

1895年には Lewis は再び "On the Lamellicorn Coleoptera of Japan, and Notices of others" (Ann. Mag. Nat. Hist. Ser. 6, X VI) なる論文を発表しその p. 337 に *Copris ochus Motsch.* を記録 "Simabara, Kobe, Nikko and Hakodate. Abundant on sandy areas" と記している。またこの種の後脛節には1外隆線を具えていて *Cantharsius* 属には2外隆線を具えるから *Copris* 属の種であると記している (*Copris* が *Helicopris*, *Cantharsius* 属と違う点は上翅に1條の側隆線を有するが *Helicopris*, *Cantharsius* 属は2條の側隆線を有することによって区別される。 *Helicopris* 属は觸角片状節の第1節が光沢あるが *Cantharsius* は全く軟毛を有することで区別される)。

1894年には松村博士が "北海道産鞘翅類 (続き)" の中で 104 *Cantharsius ochus, Mots.* ダイコクムシとして記録された (動物学雑誌 6 (65): 88)。恐らく日本人による本種の初めての記録になると思われる。同博士は1898年の "日本昆虫学" の中でも p. 172 ダイコクコガネ *Cantharsius ochus, Mots.* 馬糞中に多しとして紹介されている。共に属名は違っている。

1901年には大上宇一氏は "播磨産金亀子科" の中で (動物学雑誌 13 (156): 321) ダイコクコガネ *Cantharsius*

ochus Mots. 多からずと記録されている。本州から日本人による初めての記録になるかと思うのだが同じ著者の1907年に発表した“播磨産甲虫類(承前)”(昆虫世界Vol.11, No.116, p.159-160)の中には出てこないこのあたり若干疑問もある。

本種の一番古く図説されたものと言うことになると1906年の松村松年博士著“日本千虫図解 第三”(p.74, pl.46, f.1. 学名はCantharsius 属) だと思ふ。岡本半次郎博士が1924年に発表になられた“The Insect Fauna of Quelpart Island”(Bull. Agr. Exp. St. Gov. Chosen 1(2):4-233, pl.7-10)の中でp.170, 54にCatharsius ochus Mots. ダイコクコガネ Many specimens. A common insect in Corea and Japan(Honshu) と書いておられる。

戦前を代表する日本の甲虫に関する文献にはほとんど図説をされている。ただ北海道の分布は原記載からして北海道産ではないかと考えられこの地には現在に至るまで多く産しているのに分布として取りあげていない文献が割合あった。

1937年西島 浩氏が札幌付近に多産するが北海道での今迄の記録は無い様だがと言う質問に加藤正世博士は北海道分布の記録は無かったと答えておられる(昆虫界, Vol.5, No.42:591)。このあたり情報把握が不十分であった様である。加藤博士の図鑑もそうであるし, “だいこくこがね亜科の分類”(昆虫界Vol.5, No.39:293, 1937)でも北海道の分布は無い。同時に三輪勇四郎・中條道夫博士の“日本産鞘翅目分類目録Pars.5, 金龜子虫科”(1939)にも北海道は扱われていない。

四国の分布も戦後の文献でも取りあげていないものが多い。記録を見ても今一つ分布地には取りあげたものはあっても具体的な状況の報告が不十分である。このあたりどうなっているのだろうか。そこで文献によって全国的な分布を眺めて見たい。筆者所有の文献からの収録であるから多くの脱落はあると思われるが大体の傾向はうかがえると思う。

ダイコクコガネの国内分布記録

北海道(松村, 1894. 安田幸夫, 1940 昆虫界8(82):850), 札幌(西島 浩, 1937 昆虫界5(42):591), 湯ノ川, 赤川, 横津岳, 森町, 枯内町(函館近傍)(柳田 勇, 1939 昆虫界7(67):522)。

岩手県(竹内誠一, 1940 岩手県甲虫誌:120)。

山形県蔵王山小倉沢, 坊平(櫻井俊一, 1982 山形昆虫同好会々誌(11):8)。

新潟県Sado:Sawada(中根猛彦・馬場金太郎, 1960 長岡科学博物館報:2), 佐渡島(本間義治, 1982 新潟県昆虫図鑑(下), p.43), 佐渡金北山(後藤光男, 1955 原色日本昆虫図鑑p.89)。

栃木県日光(平山修次郎, 1933)。

茨城県(日置正義, 1973 瑠璃星1:2)。

群馬県北甘楽郡（小板橋秀治，1935 昆虫界 3 (18/19):381），尾瀬（野村 鎮，1936 昆虫界 4 (3 2):700），四萬温泉（竹内誠一，1937 昆虫界 5 (42):522），熊ノ平（平山修次郎，1933）。

埼玉県大滝村上中尾（斎藤良夫，1978 埼玉県動物誌：225）。

千葉県長柄町（武田卓明，1984 月刊むし(157):36.,(165):22. 山崎秀雄，1985 千葉県生物誌35 (1):8）。

東京都三宅島（梅谷猷二，1954 虫報(10):9,12-13.,野村 鎮，1969 昆虫学評論21(2):71-94., 渡辺泰明，相馬州彦，1972 東京農大農学集報17(1):31，越智輝雄，1985 原色日本甲虫図鑑，II）。伊豆大島町泉津（平野幸彦，1983 月刊むし (153):36., 榎戸良裕，1983 月刊むし (154):21-22）。式根島（越智輝雄，1985 原色日本甲虫図鑑，II）。

神奈川県小田原（平野幸彦，1974 小田原市郷土文化館研究報告(10):34.,1981 神奈川県昆虫調査報告：288）。

長野県美ヶ原（後藤光男，1959 ニュー・エントモロジスト 8 (2/3):20），菅平高原（石塚秀樹，1964 はばたき(66):2-3），三成牧場，菅平北信牧場（下井 守，1969 昆虫と自然 4 (1):7），真田町菅平，川上村，小川牧場，松本市三城（木内 信，1982 まつむし (66):2）。

愛知県本宮山（穂積俊文，1974 佳香蝶26(100):107,佐藤正孝・穂積俊文，1984 愛知の動物：19 1）。

和歌山県（岡本，1938）。

大阪府箕面（関，1934.,殿村，1938.,矢上，1942.,後藤，1965,1967）。

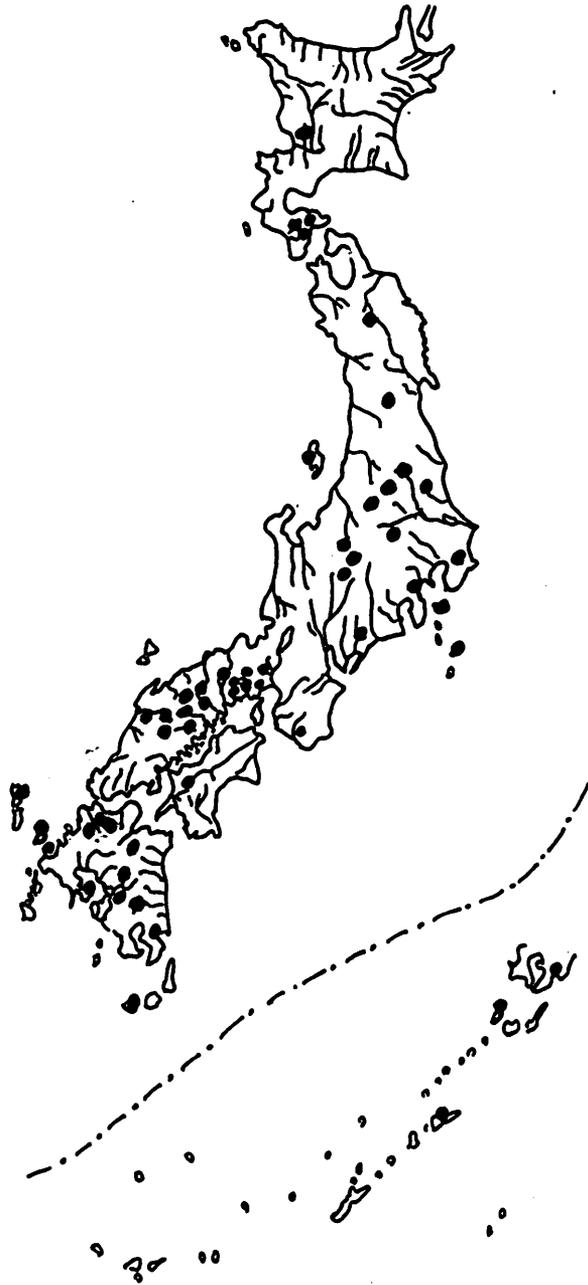
兵庫県：兵庫（Waterhouse,1875）。神戸（Lewis,1895），舞子（1♂，VII-1938,Furukawa leg.），神崎郡大山村（4♂，2♀，23-IX-1952,17♂，14♀，4-IX-1955,T.Takahashi leg.）（畑中，19 54），神崎町（石飛，1971）。多可郡三谷（1♂，1♀，15-IX-1974,1♂，29-IX-1974,3♂，2-VIII-1975,7♂，8♀，26-VIII-1975,2♂，3♀，13-IX-1975,6♂，3♀，4-IX-1976,T.Takahashi leg.），三国岳（1♂，1♀，22-VII-1959,K.Okamoto leg.），揖保郡（大上，1901），氷上郡神樂，久下（山本，1958），遠飯，葛野（足立，畑中，1955），出石郡正法寺（高橋，1963,1981），養父郡鉢伏山麓鉢高原（T.Yamaguchi leg.，高橋，1981），関宮町葛畑（谷角，1982）。

岡山県北部（倉敷昆虫同好会，1978 岡山県の昆虫：128），真庭郡蒜山，中福田，塩釜牧場（桂孝次郎ほか，1973 蒜山の生物調査報告：154），高梁市春木（近藤光宏，1978 すずむし(115):24）。

鳥取県伯耆大山（高橋寿郎，1939 昆虫世界43(508):362），東伯郡関舎町犬狹峠（河本哲至・井上敏明，1978 すかしば(10):7）。

広島県高野町新市（中村慎吾，1966 比和科学博物館研究報告10:7.,1977 比和の自然：265-266），高野町，吾妻山（水田国康ほか，1972 広島県の会々報(11):4）。

島根県三瓶山 (近木英哉, 1979 昆虫と自然14(5):5)。
愛媛県 (矢野俊郎, 1961 松山昆虫同好会時報16:5)。



ダイコクコガネの国内記録地集

福岡県福岡市平和台球場（与子田紀元，1955 筑紫の昆虫 1(1):34），英彦山（神谷寛之，1959 彦山昆虫目録p.20），門司市福智山（真田行之助，1959 北九州の昆虫 6(3):78）。

長崎県馬渡島（山口兵衛，1941 昆虫界 9(84):83，角田浩之ほか，1984 VITAE Vol.25:21）．
老岐（益本仁雄，1968 昆虫と自然 3(3):36），老岐半城・岳の辻（浦川虎郷ほか，1977 老岐の生物：359），対島（野村 鎮，1976 対島の生物：354），島原市新山，俵石，田代原牧場（今坂正一・越智輝雄，1979 北九州の昆虫 26(1):13）。

大分県九重山兼沢水牧場(Somi)，青柳(Aoya)，境川(Sakai-gawa)，赤川(Akagawa)(三宅義一，1957 北九州の昆虫 4(1):19)。

熊本県阿蘇郡久木野村黒川，草千里，湯浦，長野的石，球磨郡水上村，尾の岳（大塚 勲，1961 北九州の昆虫 8(1):16）。

宮崎県霧島山麓（磯崎恵明，1968 タテハモドキ(3):33，清水 薫，1969 霧島山総合調査報告書：262）。

鹿児島県志布志町・ロ永良部島（黒沢良彦，1974 甲虫ニュース (21/22):8），奄美大島（野村 鎮，1960 桐朋学報 (10):47.，後藤光男，1969 昆虫学評論 22(1):8）。

御覧頂けるとわかる様に大体日本全般に分布している種ようであるが北海道地方には多くいる様に思われるのにもかかわらず東北地方での産の記録が今一つ少ない様に思われる。

関東地方での産も割合少ないようである。1936年東京の渋谷区，世田谷区から*Copris tripartitus* コダイコクコガネ稀なりの記録がある（昆虫界4(34):870）。この種が*C. pecuarius* ミヤマダイコクのことかダイコクコガネの小形なのか良くわからない。現在の東京都内に本種を産することに就いては疑問を感じるが一。

神奈川県でも小田原と言う記録がある（平野，1974,1981,1983）が此処もこの記録のみで現在産出してないのではないだろうか。伊豆諸島三宅島，大島（梅谷，1954．野村，1969．渡辺・相馬，1972．平野，1983．榎戸，1983）での記録も注目されて良い。ただそれらの島で現在でも産出しているかどうか若干問題はある。

次は近畿地方である。

小寺正文氏は1932年に箕面にてダイコクコガネを採集した報告をしておられる（関西昆虫学会時報 4号）。同じ年戸沢信義氏は“箕面山昆虫目録”を発表されp.83に1794ゴホンダイコク，1795 コダイコクコガネの記録をしておられるがダイコクコガネの記録はない。コダイコクコガネ（学名は*C. tripartita*になっている）がミヤマダイコクコガネ*C. pecuarius* を意味するのかダイコクコガネを意味するのか良くわからない。氏は京都からもコダイコクコガネ*C. tripartita*の記録をしておられる（紫水遺稿，別巻，p.40,313,1936）。文献上での箕面のダイコクコガネの記録は上記小寺氏のもの

が一番初めてのように思われる。

関公一氏は1934年“大阪・神戸付近の金亀子虫”（昆虫界2(9):313）の中でダイコクコガネ *C. ochus* を記録” 9月より箕面山に発生するも稀。沢野芳介氏採集”としておられる。その後の後藤光男氏による“箕面山の動物相調査”の中での記録(1965,1967) は之の利用のようでありその後本種を産すると言う記録は正式には見られない様なのだが一。岸 博幸氏による“箕面の自然”の中の甲虫類 (p. 67-72, 1967. 六月社) にも本種に関する言及は無い。殿村 徹氏の箕面の記録があるが(虫の世界2 (1):22, 1938), 和名だけの記録であり今一つ良くわからない。矢上弘司氏も可成り前に絶滅したのではないかと記しておられる (Amateur Entomology 3(3):15, 1942)。1986年福貴正三氏と猪名川々原での採集を共にさせて頂いた時御伺いしたのでは1930年代には箕面のダイコクコガネは割合いた様で場所は高山道から北の方の様で当時採集された標本も現在御持ちの由であった。ただ現在は様相も変わり、牛、馬糞が見られなくなって恐らくいないだろうとのことでもあった。

和歌山県から記録はあるが之も和名だけのものでありその後の記録と言うものを知らない(岡本四郎, 虫の世界 2(11/12):24, 1938)。

ミヤマダイコクコガネは後藤光男氏によると三重県武平峠, 京都府貴船, 滋賀県比良山と産地が知られているが(昆虫学評論 7(2):57, 1956) 現時点でダイコクコガネを確実に産するのは近畿地方で兵庫県のみになるかと思う。兵庫県下でも戦前迄は神戸市内にも見られ特に明治時代には可成りいた様に記録されているが現在ではまづ神戸市内産は絶望であろう。兵庫県下で現在分布しているのは中国山脈を主体にしている。中国地方にその産地をのぼしているのだが広島県あたりに行くとダイコクコガネよりミヤマダイコクの方が多し行った記録が見られる。伯耆大山とか三瓶山麓などは良く知られた産地であるがどちらかと言えば山地性の種であると同時に農村の機械化の影響からその産地は次第に限定されつつあるようだ。

四国の産は前にも少々ふれた様に今一つはっきりしない点が多い。もっと詳しく調べて貰いたいと思う。

九州各地には広く分布している様である。朝鮮半島(特に南鮮)にも可成り広くまた多く産する様であるので(C.W.Kim “Distribution Atlas of Insects of Korea” p.319-320, 1978)。杓岐, 対島, 北九州にかけては多く分布しているように思われる。

ただ南限と言うことになる、どうも奄美大島にはいない様なので現時点では鹿児島県志布町・口永良部島と言うことになるのだろう。

国外では済州島, 朝鮮半島, 中国, モンゴルと広く筆者は中国大陸中央部揚子江南岸で牛糞に来ていたのを見ている。

本種の分類並びに形態については終戦後いち早く中根猛彦博士は日本産ダイコクコガネ群の種名の

検討を発表になられた(動物学雑誌 57巻, 4号, p.55-56, 1947)。そしてダイコクコガネ属の各種については1948年新昆虫に図を入れて解説され(Vol.1, No.2, p.10-13), 以後1955年(あきつ, Vol.4, No.2, p.44-50)と1956年(昆虫学評論Vol.7, No.1, p.23-27)に詳しく同じ様に解説されているので各種の図鑑による図説と共に十分に熟知されている。

生活史については石飛敦郎氏が“ダイコクコガネの採集と飼育”を発表になっておられる(昆虫と自然 Vol.6, No.4, p.16-20, 1971), 同属のゴホンダイコクについては水田国康, 三宅義一氏の“ゴホンダイコクの飼育”(北九州の昆虫 Vol.5, No.2, p.23-29, 1958)の詳しい報告もある他蓑虫類の飼育, 生活についての報告は色々ある(三宅義一, 大和の昆虫 No.3/4:26-30, 1966., インセクタリウム Vol.6, No.6:108-111, 1969., 木内 信, インセクタリウム Vol.16, No.10:236-240, 1979等)。従って或る程度本種の生活はわかっていると見えよう。ただ残念なことに始めにもふれたように本州に於いては開発の進展, 農村形態の変革等々によってこの虫の生活が苦しくなり特定の地での産出化がますます大きくなり, 次第に吾々の眼から遠ざかってゆくように思われる虫の1種のようにである。

(MAY 1986)

兵庫県 の ベニボタル (3)

(兵庫県 甲虫 相 資 料 ・ 190)

高橋 寿郎

19. *Lopheros septentrionalis* (Kōno, 1932)。

キタベニボタル

本種は河野広道博士がAplatopterus属で樺太, 千島(国後島), 北海道定山溪産標本で新種として記載された種である(Ins. Mats. Vol. 7, No. 1/2, p. 58, fig. 1, 1932)。

河野博士の図説(日本昆虫図鑑, 1950), 中根博士の原色図説(1963)共にAplatopterus属で図説されている。中根博士は“日本動物誌”の中でLopheros属に移されると共に原色図版をつけて図説された(1969)。他に佐藤正孝・松田 潔氏による原色図説がある(1985)。

本種は北方系の種で長野県から西の記録が無かったように思う。筆者は宍粟郡音水で飛翔中の1♀を採集した。この標本は確認のため辻 啓介氏に御送りして同氏の手許に保管されている。恐らく分布の西限になるのだろうと思う。その後全く採集出来ていない。

産地：宍粟郡音水（1♀， 24-VI-1973, T. Takahashi leg., in T. Tsuji's Coll.）。

20. *Dictyoptera gorhami* Kōno, 1932 ヒシベニボタル

河野広道博士によって*Dictyopterus* (*Dictyopterus*) *gorhami*としてE. Gallois 採集の高雄山産の2♂2♀標本で記載された(l. c., p. 57, 1932)。

Gorhamが1883年Oyayama で1881年4月古い樹のまわりを飛び廻っていたのを採集した標本に基いて図入りで記載した(l. c., p. 400-401, pl. X VII, fig. 7) *Eros erythropterus* が本種のことである(*Dictyoptera*属には既に*erythropterus*なる種名があるので河野博士がこの属の種と扱うに当たって新しく命名されたものである)。戦前の図鑑に多く(松村, 1931, 湯浅, 1932, 神谷, 安立, 1933, 平山, 1940) *Dictyopterus erythropterus* と図説されているものがこの種に当る。

中根猛彦博士は1953年*Dictyoptera* Latreille, 1829属の種と扱われ(*Konchu no Kagaku*, Vol. 1, No. 2, 1953), 現在までその様に扱われている。

中根博士(1955, 1963), 佐藤正孝, 松田 潔氏(1985)のそれぞれ原色図説がある。

本州, 四国, 九州に分布していて割合多くいる種のようにである。

兵庫県下にも広く分布している。

産地：川西市笹部 [仲田, 1978, 1982]。神戸市藍那(lex., 10-VI-1978, lex., 27-VI-1978)。神崎郡大河内町川上(lex., 1-VII-1977, 3exs., 15-VII-1977)。飾磨郡雪彦山(lex., 14-VII-1957)。宍粟郡音水(lex., 20-VII-1959), 坂の谷(lex., 22-VII-1979), 氷上郡 [山本, 1958]。美方郡扇ノ山 [辻, 岸田, 1972. 高橋, 1985]。

21. *Dictyoptera oculata* (Gorham, 1883) メダカヒシベニボタル

GorhamがHakone and Miyano-shitaを産地に*Eros oculatus*として記載され(I. C., p. 401, 1883), Schönfeldtは*Dictyopterus*属の種として扱った(I. C., p. 121, 1887)。

Jacobsonは*Dictyoptera oculata*としている(*Käfer Russl.* 9:666, 1911), 現在もこの学名が使用されている。

河野博士が*Dictyoptera* (*Dictyopterus*) *sapporensis*として記載された種(I. C., p. 57, 1932)は本種のシノニムである。

日本全般に分布している種で, 原色図説は中根博士(1963), 佐藤, 松田氏(1985)のものがある。

前胸背周辺部と上翅は朱赤色で美しい。赤い毛を装う。前胸背は5室で横・後の隆条は弱い。

兵庫県下では分布は広いようだが個体数はそれ程多く見られない。

産地：多可郡烏羽(1ex.,30- IV-1972)。神崎郡大河内町川上(1ex.,7-V-1977)。宍粟郡音水(1ex., 25- VI-1972,K. Tsuji det.)。氷上郡妙高山〔高橋, 1960〕。城崎郡三川山〔高橋, 1976〕。養父郡氷の山〔1ex.,5- V-1973,M. Yuma leg.〕。

22. *Dictyoptera speciosa* Ohbayashi,1954

ネアカヒシベニボタル

大林一夫氏が福岡県産1♀, 愛媛県産1♂をタイプにして記載された種である(Mushi, Vol.26, No.9, p.19-20, 1954)。

中根博士は原色により2度にわたり詳しく解説された(1963, 1969)。佐藤, 松田両氏の図説もある(1985)。分布は本州と九州のみが知られている。

兵庫県下では余り産地が知られていなかったが少なくとも神戸市内では多くいることがわかっていいる。もっと広く分布している種なのかもしれない。本種に就いては本誌上に筆者も報告させて頂いている(Vol.12, No.2, 1984)。

産地：川西市笹部〔仲田, 1978, 1982〕。西宮市〔Nakane, 1969〕。神戸市烏原(1ex., 13- VI-1971, 1ex., 8- VI-1982, 1♂, 1♀, 14- VI-1984, 6♂, 6♀, 16- VI-1984, 9♂, 6♀, 21- VI-1984, 1♂, 28- VI-1984, 1♂, 1♀, 30- VI-1984, 1♂, 1♀, VII-1984, 1♂, 4♀, 15- VI-1985, 1♂, 2♀, 21- VI-1985, 1♂, 3- VII-1986)。相生市三瀬山(1ex., 16- VI-1974)。養父郡氷の山〔高橋, 1975, 1985〕。

23. *Dictyoptera velata* (Gorham, 1883)

アカスジヒシベニボタル

神戸の摩耶山産で*Eros velatus*と記載された種である(I. C, p.402, 1883)。Schönfeldtは*Dictyoptera velatus*と扱い(1887), Jacobsonは*Dictyoptera velata*とした。現在もこの学名が使用されている。現時点では北海道と本州の分布が知られているが本州での産地は少ないようで珍しい種の一つであろう。佐藤・松田両氏の図説(1985)がありそれによると山地の花上や葉上に見られるとなっている。兵庫県下からもGorhamの記録以外全く知られていない。良く調べて見なくてはいけない種である。

産地：神戸市摩耶山〔Gorham, 1883, Nakane, 1969〕。

尚多可郡烏羽で採集した1頭(5- VII-1975)は前胸背の隆条の状況, 觸角の第4節は第2, 3節より明らかに短い点でどうもミヤマヒシベニボタル*Dictyoptera aurora* (Herbst) だと思いのだが佐藤・松田両氏の図説(1985)では分布は本州(中部以北)となっているのでたった1頭の標本で今一つははっきりしない。

24. *Benibotarus sanguimpennis* Nakane et Ohbayashi, 1958

アカミスジヒシベニボタル

本種は中根博士と大林一夫氏により記載された種である(Akitsu, Vol.7, No.4, p.79-80, 1958)。タイプの産地は長野, 三重, 奈良県産と四国の皿ヶ嶺産である。

メダカヒシベニボタルに良く似ている種である。中根博士による原色図説(1963,1969),佐藤,松田氏(1985)のものがある。

本州,四国に分布する種であるがそれ程多くいる種ではないようである。

兵庫県下からは次の1頭を採集しているだけである。

産地:宍粟郡音水(1ex.,10-V-1970)。

25. *Benibotarus spinicoxis* (K. Iesenwetter, 1874) ミスジヒシベニボタル

Kiesenwetterが*Japonia* を産地としてEros属で記載した(I.C., p.254-255, 1874)。Schönfeldtは*Dictyopterus*属に扱った(1887)。河野博士は*Dictyopterus*(*Benibotarus*)と扱い(1932),Kleineは*Benibotarus* 属の種とした。以来この属名の種として扱われている。

分布は日本全土(九州以南の記録は無い),南千島,サハリン。中根博士の原色図説(1963),佐藤,松田氏のもの(1985)がある。

兵庫県下での記録は従来それ程知られていなかったが神戸市内では多くいる(きべりはむし Vol.12, No.2,1984)。

産地:神戸市烏原(2♂, 2♀, 5-VI-1984, 1♂, 2♀, 11-VI-1984, 4♂, 2♀, 12-VI-1984, 2♂, 14-VI-1984, 1♂, 17-VI-1984, 1♂, 1-VII-1984, 1♂, 1-VI-1985)。宍粟郡音水(1ex., 25-VI-1972, K. Tsuji det.)。養父郡氷の山 [1ex., 18-VII-1972, K. Tsuji leg.]。

26. *Pyropterus nigroruber* (Degeer, 1774) ? ムナグロヒシベニボタル

この属の日本産は1種だけ,即ち本種だけしか知られていない。ヒシベニボタル属(*Dictyoptera*),ミスジヒシベニボタル属(*Benibotarus*)に近い属である(上翅には各4隆条を具え,間は1列の格子状)。神戸市内烏原で採集した1頭(25-V-1982)も前胸背の隆条が中根の図(1953,1969)と全く同じであり本種と考えられるのであるが佐藤・松田氏の解説で本州中部以北の分布になっている(1985)。1頭だけの標本で一応本種としておくが同定違いかもしれない。

産地:神戸市烏原(1ex., 25-V-1982)。

27. *Platycis consobrinus* (Bourgeois, 1902) ムネグロテングベニボタル

Bourgeoisにより“Japan central”から*Dictyopterus* (*Platycis*) 属で記載された(Bull. Mus. Hist. Nat. Paris:90, 1902)。

Jacobsonにより*Platycis*属に扱われた(1911)。中根博士の図説(1953,1963,1969),佐藤,松田氏のもの(1985)がある。

分布は本州,九州であるが兵庫県下での記録は次のものを知れるだけである。

産地:川西市笹部 [仲田, 1978, 1982]。

28. *Platycis nasutus* (Kiesenwetter, 1874) テングベニボタル

Kiesenwetterが“Japonia”からEros属で記載した(I.C., p.255-256, 1874)。Gorhamが“Nikko; Miyanoshita; Oyama; Oyu”を産地にPlatycis属の種として記載された(I.C., p.402-403, 1883)。

図説も割合ある(学名がPlatycis nasuta となっているものがある)。前胸背の形状で区別し易い。

分布は日本全土(九州以南は知られていない)。国外では中国、アルタイ等知られている。

兵庫県下でも個体数は多くないが広く分布しているようである。

産地：神戸市山の街(lex., 10- V-1954), 丹生山(lex., 18- V-1958)。宍粟郡赤西 [lex., 21- V-1972, H. Hatanaka leg.], 音水(2exs., 10- V-1970)。氷上郡 [山本, 1958]。養父郡氷の山 [lex., 5- V-1973, M. Yuma leg.], 美方郡扇の山 [辻, 岸田, 1972]。

29. *Konoplatycis otome* (Kōno, 1942) ムネアカテングベニボタル

河野博士により産地をHonshuとのみ記してPlatycis属で記載された種(I.C., p.59, 1942)。

中根博士はこの種をタイプに新亜属Konoplatycisを創設された(1969)。のち属として昇格された(国立科学博物館専報, 第3号, p.287, 1970)。

中根博士による原色図説(1963, 1969), 佐藤, 松田氏の原色図説(1985)がある。

分布は本州, 四国, 九州, 対島である。兵庫県下での産地は余り知られていないが神戸市内で春先に大変多くいる美しい種である(きべりはむし, Vol.11, No.12, 1983, Vol.12, No.2, 1984)。

産地：洲本市三熊山 [N. Hirochi etc. 1977]。津冢郡岩屋 (1♂, 29-IV-1969)。宝塚市 [Nakane, 1969]。神戸市広野 (1♂, 10-IV-1955), 舞子 (9♂, 3♀, 16-III-1982, 4♂, 1♀, 17-III-1983), 烏原 (2♂, 2♀, 14-IV-1984, 5♂, 3♀, 15-IV-1984, 10♂, 9♀, 18-IV-1984, 1♀, 20-IV-1984, 1♂, 22-IV-1984, 1♀, 25-IV-1984, 2♂, 2♀, 26-IV-1984, 9♂, 8♀, 29-III-1985, 2♀, 30-III-1985, 1♂, 1♀, 5-IV-1985, 1♂, 6-IV-1985)。多紀郡岡野村 [Nakane, 1969]。氷上郡春日部 [高橋, 1969]。

30. *Conderis rufohumeralis* Nakane, 1969 カタアカベニボタル

中根博士がスジアカベニボタル*Canderis orientis* のvar. *rufohumeralis* とされた種(Misc. Rep. Inst. Natur. Resources, 46/47, p.88, 1958) を日本動物誌の中で独立種とされた種(I.C., pp.173-175, Fig.68, 1969)。

上翅の縦隆条は主に黒味がかかった軟毛にて被はれ基部の方は赤い軟毛を有し, 外側縁は赤い軟毛を前方とその後方に有する。

兵庫県下では中央より北の方山地帯に分布しているようである。

産地：宍粟郡音水(lex., 25- VI-1972)。養父郡関宮町熊次 [Nakane, 1969], 氷の山(lex., 25-

Ⅶ-1969) [7exs., 17- Ⅶ-1972, K. Tsuji leg.]. 美方郡扇ノ山 [辻, 岸田, 1972].

31. *Conderis pictus* Gorham, 1883 スミアカベニボタル

Gorhamが "Odaigahara, in Yamato, June 22nd, 1881" を産地に因入りで記載された (I. C., p. 404, pl. 17, fig. 4, 1883)。

中根博士による原色図説(1963)及び佐藤, 松田氏のもの(1985)がある。割合ははっきりした色彩(肩部縦条と翅端の長形紋が赤い)と前胸背の形状で区別し易い。

本州, 四国, 九州に分布し兵庫県下では中央部より北の方の山地帯に分布しているようである。

産地: 宍粟郡赤西 [lex., 27-Ⅶ-1971, H. Hatanaka leg.], 音水 (lex., 11-Ⅶ-1972, lex., 3-Ⅶ-1973)。養父郡氷の山 [Nakane, 1969]。美方郡扇の山 [辻, 岸田, 1972, 高橋, 1975]。

32. *Cautires bourgeoisi* (Harold, 1879) ネアカクロベニボタル

本種はHaroldによりHakone産でCaenia属で記載された (Stett. ent. Zeitg., 40:333, 1879)。

ほとんど図説が無いが中根博士によって詳しく記載されている(1963)し最近佐藤, 松田氏によって図説もされている(1985)。次記ミダレクロベニボタルのシノニムとして扱われて来た。可成り見分けるのが困難である。♂交尾器によると割合ははっきりする。

県下の記録は僅か次のものがあるだけである。

産地: 養父郡氷の山 [lex., 18-Ⅶ-1972, K. Tsuji leg.]。

33. *Cantires geometricus* (Kiesenwetter, 1874) ミダレクロベニボタル

KiesenwetterによりJaponia を産地にEros属で記載された (I. C., p. 256-257, 1874)。

GorhamはKashiwagi; Nara; Fukushima; Junsai を産地にMetriorhynchus属の種として扱っている (I. C., p. 399, 1883)。

大林一夫氏が1954年福島, 岐阜, 兵庫, 高知各県産のタイプ標本で記載されたCladopherus incompositus (I. C., p. 21) を中根博士はCautires属の種に扱いミダレクロベニボタルとして原色で図説された(1963)。その後同博士は本種のシノニムとされた(1969)。佐藤・松田氏の図説もある(1985)。

本州, 四国, 九州に分布している種で兵庫県下では広く分布しているように思われるが今一つその分布がはっきりしない種である。

C. incompositusと記録されているのも本種として含ませている。

産地: 川辺郡猪名川町杉生新田 [仲田, 1979], 上阿古谷 [仲田, 1978]。川西市笹部 [仲田, 1978, 1982], 大和 [仲田, 1978, 1982]。神戸市森林植物園 (lex., 14-Ⅶ-1986)。豊岡市香住 [高橋, 1975]。養父郡氷の山 (lex., 27-Ⅶ-1955, lex., 21-Ⅶ-1958, lex., 25-Ⅶ-1959) [Ohbayashi, 1954, 高橋, 1975]。美方郡扇の山 [辻, 岸田, 1972]。

34. *Cautires hyonosen* Nakane, 1969

ニセクロベニボタル

本種は中根博士が自身で氷の山で採集された1♂(30-VII-1952)標本をタイプにして記載された種である(1969)。

県下では音水でも採集出来ている。少ない種のようにである。

産地：宍粟郡音水(1ex., 11- VI-1972, K. Tsuji det.)。養父郡氷の山 [中根, 1969., 辻, 岸田, 1972]。

35. *Cautires nakanei* (J. Winkel, 1952)

カクムネクロベニボタル

J. WinkelがCladophonus 属で記載された(Acta Ent. Mus. Nat. Prage 28:405, fig. 10, 1952)種である。

屋久島に亜種ssp. *yakushimanus* Nakane を産するが原亜種の方は本州、四国、九州に分布している。

近畿地方にはあちらこちらの記録はあるが兵庫県下からは次の記録があるだけである。調査不十分の種である。

産地：川辺郡猪名川町杉生新田 [仲田, 1982]。

以上兵庫県産のベニボタル35種を記録した。大体この様な渋味な虫(見ようによっては仲々美しい種が多いのだが-)、一般受けしない虫を採集する人も余りいないし、まして調査する人もいないのが現状である。まだまだ材料不足であるし未調査地点も多々ある。始めにも述べたがより一層の努力をしなくてはならないと痛感している。

参 考 文 献

中根博士著“日本動物誌・ベニボタル科(1969)”以後の文献を掲げた。兵庫県産に関するものは拙編“兵庫県産甲虫類に関する文献目録・改訂版, 1981., 同追加篇・I, 1984”を参考にして頂きたい。また論文タイトルは省略した。

Chūjō, M. et Sato, M., 1970. Mem. Fac. Edu. Kagawa Univ. II (192): 27-31。

松田 潔・佐藤正孝, 1985. 原色日本甲虫図鑑(Ⅲ)。

中根猛彦(Nakane, T.), 1969. Fauna Japonica (Lycidae)。

-----, 1969. 昆虫と自然 4(12): 25-28。

-----, 1970. Bull. Nat. Sci. Mus. Tokyo 13(3): 357-361。

-----, 1970. 国立科学博物館専報(3): 285-288。

-----, 1975. 北九州の昆虫21(2): 29-31。

- , 1977. *Frag. Coleop.* (22-24):87-98。
- , 1980. *Rep. Fac. Sci. Kagoshima Univ. (Earth Sci. & Biol.)*, (13):127-130。
- , 1984. *昆虫と自然* 19(5):13-16。
- , 1985. *Frag. Coleop.* (38/40):154-156。
- 中根猛彦・大沢省三・小阪敏和, 1975. *広島虫の会々報* (14):125-127。
- 高倉康男, 1977. *生物福岡* (17):6-13。

(FEB. 1987)

ハラグロオテントウの生活史

東 正 雄

クワキジラミ (*Anomoneura mori* Schwarz) は年1回の発生。5月下旬～6月に出現し、成虫で越冬。幼虫はクワの大害虫で葉裏に群生、白色で尾端に白色の長い分泌物がついている。この害虫の天敵であるハラグロオテントウ *Callicaria superba* (Mulsant) の分布は本州・四国・九州；台湾・中国、チベット、インドと広い範囲であるが県下では稀な種でその採集は容易でない。

このハラグロオテントウの生活史について県下産のもので観察することが出来たので簡単に報告しておく。

1978年5月20日宝塚市西谷地域^{コバヤ}香合新田でクワの老樹からハラグロオテントウ8匹を採集し観察中5月22日夜25個の淡黄色の産卵したのを発見する。卵の大きさは長 3mm、幅 1.3mm。

5月26日20時3個の卵が図示したような黒色の区切りが見られたので孵化近いと推定。

5月30日第1回脱皮し2齢となる。

6月2日第2回脱皮し3齢となる。

6月4日第3回脱皮し4齢となる。黄色となる。この頃から蛹化し始める(?)

6月10日～11日 蛹化完了。濃黄褐色となる。

6月17日～6月21日 成化。

(17日7時頃1匹；18日7時頃2匹；18日17時頃3匹；19日13時40分頃2匹；21日成化1匹)。

蛹期 7日間(?)

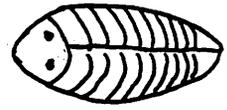
6月25日 香合新田桑の実より現地で成化したもの数匹採集持帰る。

7月1日より気温30℃以上。湿度、食餌採集につとめた。

7月20日頃より気温34℃~38℃(8月12日)水を入れて温度調節をはかった。

8月22日1匹死す。

9月16日1匹死す。



[3mm x 1.3mm]

ガラス水槽(小)で3 exs.夏すぎてから飼育 12月19~20日夜気温3℃~4℃となるため21日朝1匹死す残りこの分2匹となる。

2階南側室温(10℃~12℃)小箱容器土・木片など入れて温度保持しつつ越冬状態に入れる。12月25日死す。

1979年1月3 exs.が越冬したが1月下旬1匹死亡。

2月下旬1匹死亡。4月25日1匹死亡(4月に入ったのでプラスチック容器23℃内外上昇したのか?)失敗であった。成虫越冬することがわかった。

1979年5月12日香合新田に出掛け現地で調査すると昨年と同じ所のクワの老樹に数匹生存していた。

以上大変粗雑ではあるがハラグロオオテントウの生活史の一端を報告する。

兵庫県産珍稀な蛾類の追加

東 正 雄

昭和40年刊行の「京阪新の動物」には19種の珍稀な蛾類を報告した。その後兵庫県下で採集されたなかで著しく珍稀であるもの、やがて絶産となる蛾類について追加する。資料を提供された採集者や協力者に対し深く感謝する。

エゾシモフリスズメ *Maganoton scribae* Astant (スズメガ科)

開張100~120mm。シモフリズメに似るが前翅の基部後縁に黒色毛があること。前翅の第2・第3室の黒色縦線が巾広いことによって区別できる。成虫は6~8月に出現する。分布は広いが稀である。鳥取県大山、石川県白山の麓の市ノ瀬、ハチ高原の大久保(15-Sep.-1975)での採集記録がある。幼虫の食草はドロヤナギ、ホホノキの葉である。

コウチスズメ *Smerinthus tokyonis* Matsumura (スズメガ科)

開張46~60mm。ウチスズメガに似るが著しく小型。成虫は4~7月に出現するが稀である。分布：本州(埼玉県三峰山、箕面山、比叡山、京都府綾部市、氷上郡妙高山(山本義丸)、柏原(山本義丸)、関西学院千刈キャンプ場で1975年5月4日採集。宝塚市西谷で1976年5月23日♀♂採集。新神戸駅の燈火で1976年8月10日本吉 要採集、 四国(愛媛県面河溪)。幼虫の食草は不明である。

コエビガラスズメ *Sphinx ligustri constricta* Butler(スズメガ科)

開張8.5mm内外。前・後翅に2本の黒褐色帯があるが、前翅の内側は著しく不明瞭となる。腹部背面各節の両側基半部に淡紅色の鱗毛がある。

分布は北海道、本州、四国、九州と広い範囲であるが稀産。山地性。成虫は5~8月。幼虫はイボタ、トネリコ、ガマズミ、シジミバナ、シモツケ、ユキヤナギなどを食う。

この種も北部開発が実施されたら絶産となる。宝塚西谷で1976年5月20日燈火に飛来せしものを採集。

エゾヨツメ *Agria tau microtau* Inoue(ヤママユガ科)

原産は中欧、北方系の珍しい蛾。北海道から九州まで分布しているが出現期が4月中旬~5月上旬である為なかなか見られない。

開張♂70mm内外、♀は90~100mm。♂の觸角は羽毛状。♂の翅の地色濃褐色、♀は淡褐色。斑紋も深く半透明である。幼虫はハンノキ、クリ、コナラの葉を食う。6月上旬頃落葉の間などでまゆをつくる。蛹で越冬する。近畿での採集記録は箕面、奈良県吐山、有馬温泉、比叡山等で燈火に飛来したもの。宝塚市西谷地区で1977年4月10日採集したのは水田の稻株に静止していた。

この蛾もやがて絶産となるだろう。

ウスタビガ *Rhodinia fugax fuagx* Butler(ヤママユガ科)

開張 80mm内外。♀は100mm内外。♂の觸角は羽毛状、♀は兩櫛齒状。♂橙褐色。前翅は細く、翅頂部は外方へつきでる。♀は大きく黄色。前翅の幅は広い。年1回発生。成虫は11月に出現する。まゆを俗にヤマビュシヤクとかツリカマスと呼んでいる。卵はまゆから出た♀がまゆか樹の枝に産みつける。卵で越冬。幼虫はクリ、クヌギ、コナラ、ハンノキ、サクラ、カエデ、ケヤキ等の葉を食って成長しやがて6月中旬頃緑色で長い柄のあるまゆを作りその中で蛹化する。分布は広く本州・四国・九州の山地性である。戦前は阪神間(六甲山・有馬・大阪箕面山・妙見山)などの山地のふもとはは晩秋頃かなり見られたが、昭和30年頃から自然林や原生林が急速に少なくなった。その結果だろうかこの蛾が次第に減少した。1970年以後は分布が局限したのだろうか稀である。やがて絶産となるだろう。産卵数がすくないのも稀産である一要因と思う。

イボタガ *Brahmaea wallichii japonica* Butler(イボタガ科)

開張80~115mm。翅の表面には複雑な縞模様と眼状紋がある。昭和の初期頃は普通で3月下旬から4月にかけて羽化し燈火に飛来したが最近極めて稀である。1977年2月6日イボタノキの根もと近くの土中から蛹を採集。持帰って室内の飼育容器での成化は3月11日であった。蛹は黒褐色でやや大きく、腹端に錐状の突起がある。

幼虫はイボタノキ、トネリコ、ヒイラギ、ネズミモチなどの葉を食う。第1令~第4令幼虫は中胸・後胸・肛上板に各1対第8腹節背面に1本の長い黒い突起がある。第5令で突起は消失する。5月下旬頃老熟幼虫は土中で蛹となる。

分布は北海道・本州・四国・九州と広いが近年極めて稀である。大阪府箕面山、有馬温泉(1949年5月5日♂)。土佐沖島母島(1952年3月6日)。貝川(1960年3月31日)。和歌山県三尾(1971年4月3日)。新神戸駅の燈火(1976年4月24日)など各地の採集記録がある。宝塚の北部の開発が実施されると絶産となる。

ヒメアケビコノハ *Othreis fullonica* Clerk(ヤガ科)

開張95mm内外。暖地性である。8~10月に成虫は出現する。

分布：本州(宇都宮)、四国(愛媛県)、九州(英彦山、佐世保、対島)、奄美大島の記録がある。ハチ高原大久保で燈火に飛来したのを岡崎 宏が1974年9月15日採集。印度での食草はアオツヅラ科のものであるが日本では不明である。

キマエコノハ *Eumaenas salamina* Cramer(ヤガ科)

開張130mm内外。美しいヤガ科の一種。暖地性で台湾、中国南部、南太平洋諸島に分布する。九州・本州では偶産蛾で風などによって運ばれたものがたまたま採集されたのだろう。採集例：沖縄、九州では福岡県北九州市奥畑、長崎県福江市、対馬豆酸、大分県別府市、宮崎県。四国(徳島県)。本州では山口県阿武郡阿東町、鳥根県、広島市黄金山。和歌山県田辺市、三重県御在所岳。兵庫県ハチ高原大久保で燈火に飛来したのを1975年8月4日水島正司採集。幼虫の食草は暖地ではツツラフジ科のものであるが日本では不明である。

シロモンフサモクメ *Eutelia sinuosa* Moore(ヤガ科)

開張38mm内外。暖地性。6～7月、9～10月に出現する。分布は本州(岐阜、吉野、大峯山、比叡山、箕面山、兵庫県柏原町)、四国、九州(屋久島)、ボルネオ、印度と広いが局限的でごく稀で絶産となるだろう。

ヒメシロモンドクガ *Orgyia thyellina* Buler(ドクガ科)

開張♂は21～29mm。♀は30～42mm。出現は6～8月、10～11月。秋に羽化する♀は翅が退化して著しく短い(宝塚市宝梅1丁目で1975年10月25日採集)。又自宅でナガバユキシタの葉を食っていた幼虫を飼育して1976年6月18日♀の成化を観察した。食草はリンゴ、ナシその他の植物。分布は北海道、本州、四国、九州、韓国、東シベリア、台湾と広域であるが個体数は著しく少ない。

宝塚大橋の照明燈で採集した蛾(続報その7)

新家 勝

I. はじめに

今回は1986年中の採取品について報告させていただく。今回もまた、採集場所は「宝塚市」を省略

して記載する。

II. 採集結果

1. Noctuidae ヤガ科

- (1) *Xanthodes transversa* Guenée フタトガリコヤガ
1986.9.5 武庫川町
- (2) *Rivula biatomea* Moore タケアッパ
1986.7.24 南口2丁目

2. Geometridae シャクガ科

- (1) *Scopula ignobilis* Warren ウスキクロテンヒメジャク
1986.9.20 南口2丁目
- (2) *Parabapta clarissa* Butler ウスアオエダジャク
1986.6.19 南口2丁目
- (3) *Paradarisa comparataria kurosawai* Inoue ヒロバウスアオエダジャク
1986.10.9 南口2丁目
- (4) *Ourapterix obtusicauda* Warren コガタツバメエダジャク
1986.6.19 南口2丁目

3. Pyralididae メイガ科

- (1) *Aglossa dimidiata* Haworth コメノシマメイガ
1986.6.18 南口2丁目
- (2) *Bradina geminalis* Gradja モンウスグロノメイガ
1986.6.13 南口2丁目
- (3) *Micractis nubilaris* Hubner アワノメイガ
1986.5.31 南口2丁目

III. まとめ

1986年中の新たな採集品は、ヤガ科2種、ジャクガ科4種、メイガ科3種の計9種であり、ここで蛾の採集を始めて以来の最少であった。9年間も同じ場所で採集しているので、新たな種が余り採れなくなるのは当然としても、既採集の種でみられなくなったものも多くあり、全般的に個体数が著しく減って来た。しかし、1985年にはほとんどみられなくなったキアシドクガに復活の徴があり、群飛とは言えないまでも、かなりの個体がみられた。また、余談ではあるが第14巻第1号で報告したオオホシカメムシは10月前半に非常に多く、1986.10.6に96頭、10.9に20頭、10.15に128頭を捕獲した。昆虫類が減少する中で、増加しているのは蜘蛛類であり、橋の欄干は

オニグモの仲間と思われるクモの巣でいっぱいである。このような状態の元で年間に新たに採集ができる蛾は数種程度になるものと予想されるが、今後とも採集を続け、毎年、報告するのが困難であれば、何年分かを纏めて報告するつもりである。

IV. 参考文献

- 講談社 日本蛾類大図鑑
北隆館 原色昆虫大図鑑 I
保育社 原色日本蛾類図鑑上、下

神戸市北区山田町(鈴蘭台周辺)の蛾

松本 健嗣

1. キスジウスキヨトウ *Archanara sparganii* ESPER

1 ♀ 14-VII -1973 北区甲栄台

以前(1979)地元自然保護団体の報告書にガマヨトウとして記したがこれは本種の誤りであった。低層湿地の蛾と云はれ山間盆地鈴蘭台らしい種だと思う。

2. マイコトラガ *Maikona jezoensis* MATSUMURA

1 ♂ 29-IV -1986 北区山田町藍那

稀れな種でこれ迄に知られた産地は北海道から福井県迄の日本海側と中部山地、及び伊豆半島から屋久島に至る太平洋側であり、兵庫県では洲本市で採集されている(1972登日)。上記藍那での記録は近畿中軸、山陽地方では最初ではないだろうか。

以下3種のシャクガ科は余り多くないものとされている。

3. コトビスズエダシャク *Petelia rivulos* BUTLER

1 ♂ 28-VI -1986 1 ♀ 20-VI -1984 山田町藍那

食草はクロウメモドキ科ケンボナシとされており、藍那附近には喬木が多く見られる。

4. ソトシロモンエダシャク *Cleora venustaria* LEECH

1♂9 -VI -1982 1♂26-V -1985 山田町藍那

5. ナミスツシロエダシヤク *Myrteta tinagmaria* GUENÉE

1♂22-IV -1985 1♀19-IV -1985 山田町藍那

参考文献

1. 蛾類通信No.73(1973 日本蛾類学会)
2. 藍那地区自然環境調査
3. 原色日本蛾類図鑑(保育社)
4. 原色昆虫大図鑑I(北隆館)
5. 日本産蛾類大図鑑(講談社)

宝塚市清荒神のチョウ(追録6)

加藤信一郎

今年は年初から天候不順で、季節のズレ込みが目立った。地域によりその原因に差異はあるが、日本列島全域にわたって、高地・平地、南北を問わず各地で現われた現象のようである。筆者は6月中旬沖縄本島北部で4日間、那覇で10日余りチョウの調査を行なったが、特に北部では春先から雨が少なく、梅雨に入ってもほとんど降らなかったため、植生の発育が全般に悪く、昆虫の発生期のズレと発生頭数の少なさが顕著であった。清荒神周辺でも例年に比べて発生期の遅れが認められた。

ナガサキアゲハは数頭目撃しただけで、昨年引き続き減少しており、一昨年、昨年と発生したアサギマダラは全く目撃しなかった。ただ、この地域では初めてコツバメが採集されたので報告する。

1. コツバメ *Callophrys ferrea* Butler

1♂. 6-4-1986. 採集場所は清荒神参道脇道東側の疎林々縁の小道で、採品は吸水中のわい小な個体である。採集者谷友晴(同所蔵)。

これで清荒神で確認されたチョウは47属、59種となる。

兵庫県で採集したエンマムシの記録

沢田和宏

兵庫県のエンマムシ相については、本会の高橋寿郎氏による詳細な解説(PARNASSIUS, No.29, 1989)があり、それによると、兵庫県からは34種が記録されている。また別に、エンマムシモドキが2例(豊岡高等学校昆虫標本目録、1975及び、きべりはむし、14(2)、1986)。更にツノブトホソエンマムシが1例(きべりはむし、13(2)、1985)報告されており、現在兵庫県からは3科36種のエンマムシ類が記録されていることになる。

筆者は、1986年の9月末、赤穂市、姫路市の海浜と神戸市およびその近郊で採集を試みたところ、兵庫県からは未記録と思われる1種を含む8種のエンマムシを採集することが出来たので報告しておきたい。

1. *Hypocaccus asticus* LEWIS ヒメハマベエンマムシ

5 exs., 姫路市的形、26. IX. 1986.

兵庫県未記録種。海浜性のエンマムシであるが、体長は2 mm程で大変小さく発見しにくいいためか、各地海浜に決して稀ではないのに記録を殆んど見ない種である。

体長が小さいためばかりでなく、生息場所も他の海浜性エンマムシとは異なるようで、魚の死骸や海藻クズの下からは採集されないために記録が極めて乏しいようである。

筆者の経験では、本種が生息している場所は、砂が黒っぽくて粒も小さく密な感じのする砂地で、海水の全くかからない海浜上部の植物根際周辺で、ケシマグソコガネやスナゴミムシダマシが生息しているような環境である。

兵庫県の他の海浜でも、前述のような場所を調べれば新たな生息地が見つかると思う。

2. *Hybocaccus varians* (SCHMIDT) ハマベエンマムシ

3 exs., 赤穂市唐船サンビーチ、23. IX. 1986; 1 ex., 姫路市的形、26. IX. 1986.

海浜の砂の中より採集した。兵庫県からは明石市、姫路市、西宮市それに津名郡淡路町の各海浜から記録されている。海浜性のエンマムシでは最も普通に見られる種であろう。

3. *Dendrophilus xavieri* (MARSEUL) オオマメエンマムシ

1 ex., 三木市別所町下石野、27. IX. 1986.

本種は、兵庫県からは過去に城崎郡日高町から1例だけ採集例が報告されているようである。今回は鶏糞から1頭しか採取できなかったが、他の各地での採集経験では鶏糞に極く普通に産し、1度に

数10頭採集されることも珍らしくない。

4. *Carcinops pumilio* (ERICHSON) クロチビエンマムシ

3 exs., 神戸市長田区大日丘, 24. IX. 1986; 10 exs., 三木市別所町下石野, 27. IX. 1986; 2 exs., 三木市別所町小林, 27. IX. 1986.

今回採集した3ヶ所のうち、三木市別所町小林では牛糞下から採集したが、他の2ヶ所は鶏糞からの採集である。

筆者の経験では、養鶏場に生息するエンマムシでは本種が最も普通に見られる種類であり、採集頭数は上記の通りであるが、極めて多数の個体を確認している。

神戸市長田区の山頂にあった養鶏場では、数百頭を確認しているし、一方、三木市別所町下石野には、なだらかな丘の上に大規模な養鶏場が8軒程あり、筆者はその内の1軒で採集をさせてもらったが、その1ヶ所の養鶏場だけでも数千頭の本種が発生しているのは間違いなく、他の7軒の養鶏場を合わせれば恐らく数万頭の個体が発生していたものと思われる。

兵庫県からはキノコなどから採取されているようなので、動物の腐敗物に好んで集来するようである。

5. *Merohister jekeli* (MARSEUL) エンマムシ

1 ex., 神戸市長田区大日丘, 24. IX. 1986; 2 exs., 三木市別所町下石野, 27. IX. 1986.

本種も鶏糞にはよく見られる種で、上記2例も鶏糞から得た。

6. *Atholus depistor* (MARSEUL) ムナクボエンマムシ

10 exs., 三木市別所町小林, 27. IX. 1986.

7. *Atholus pirithus* (MARSEUL) ツヤマルエンマムシ

5 exs., 赤穂市中浜町, 23. IX. 1986; 14 exs., 三木市別所町小林, 27. IX. 1986.

8. *Atholus duodecimstriatus quatuordecimstriatus* (GYLLENHAL) コツヤエンマムシ

18 exs., 三木市別所町小林, 27. IX. 1986.

上記3種は、通常、獣糞、腐敗動物質から発見され、今回の4例も牛糞からの採集である。本県からは3種共多数の採集例があるようである。

西宮市でネプトクワガタを採集

田中 稔

西宮市でネプトクワガタ *Aegus laevicollis* を採集しているので報告する。

1 ♀、西宮市仁川百合野町、15Ⅷ1985、田中稔採集

柳の老木に来ていたのもので、樹液に頭を突っ込んでいた。附近のアカメガシワ、コナラにはノコギリクワガタ、コクワガタ、ヒラタクワガタが少ないながら産する。

(〒662 西宮市六軒町8-7)

アオドウガネの食草についての報告(続報その2)

新家 勝

アオドウガネの食草について、その後の知見を報告させていただく。

(1) Ⅶ、12、1986 宝塚市安倉北四丁目 安倉上池

ドウガネに混り、アマコノシリヌグイ及びエビゾルの葉を食害していた。

(2) Ⅷ、23、1986 宝塚市安倉北四丁目 安倉上池

エビゾルの葉を食害していた。

宝塚市とその付近におけるヒラタアオコガネの採集記録

新家 勝

(1) V、8、1977 西宮市武田尾、読売ゴルフ場 1 Ex.

国鉄福知山線の武田尾駅から武田尾温泉旅館街を抜けて急坂を登り、読売ゴルフ場のグリーンに上がったところ、暖かい太陽の光を受けた芝生の上を多数の小型のコガネムシが活発に飛び回っていた。ウスチャコガネのはか見慣れない緑色のコガネムシがあり、これが初めて見るヒラタアオコガネであった。

(2) VI、2、1984 宝塚市長尾山 宝塚高原ゴルフ場 1 Ex.

中山最高峰を北へ下り、十万辻から生瀬橋に通じる烏脇宝塚停車場線の県民の森まで歩いたとき、宝塚高原ゴルフ場で、前述同様、芝生の上を活発に飛び回っているのに出会った。

本種が六甲山上のゴルフ場に多いことが、本誌第14巻第2号で紹介されていたが、本種はやはりゴルフ場と関係が深いようである。付近の他のゴルフ場についても探してみたい。

ツマアカマルハナノミダマシの記録

(兵庫県甲虫相資料・191)

高橋 寿郎

ツマアカマルハナノミダマシ *Eucinetus haemorrhoidalis* Germar の県下での記録は仲田元亮氏が川西市大和から割合多くの個体を採集されたものがある〔仲田、1978、1982〕。それ以外の地では全く知られていない。筆者は美濃郡吉川町市野瀬で積み重ねられた薪から1頭採集しているので此処に記録しておきたい(26-VI-1985)。仲田氏は学名を *Eucinetus rufus* Portevin とされている。これは中根 猛彦博士の原色昆虫大図鑑Ⅱ (pl.70, f.2, p.139, 1963) によったものと思はれる。

酒井雅博氏は1985年の原色日本甲虫図鑑(Ⅱ)で上記学名で図説されておられる (pl.77, f.2, p.420)。 *Eucinetus* 風の日本産の3種は再検討の要があるとされている。かなり小さい虫でありあまり採集されていないグループだけにわからないことが多くあるようである(酒井氏によると菌の生じた朽ち木や枯れ草の堆積下で発見されるグループとされている)。

(JAN. 1987)

トウヨウダナエテントウダマシ 三木市口吉川町にて採集

(兵庫県甲虫相資料・192)

高橋寿郎

トウヨウダナエテントウダマシ *Danae orientalis* (Gorham, 1873) は Gorham が G. Lewis 採集の Hiogo 産 (当時の表現で現在の神戸市) 2 頭の標本で *Coniopoda orientalis* と記載された種である (Ent. Month. Mag. V. ol. IX: 205, 1873) (日本と九州に分布とも記している)。その後再び Gorham は日本産のテントウムシダマシ科の改定版を発表 (Proc. Zool. Soc. London. No. XLIII, 1887)、その p. 643 で *Danaë orientalis* と訂正しておられる。Hab. KIUSHIU: Nagasaki, Ichiuchi, Kobe となっている (日本の地理が良く理解出来ていなかったのであろう)。そして “*D. orientalis* occurs in haystack-refuse in early spring” と記している。

1931年太田勇愛氏は日本産テントウダマシに関する論文を発表された (Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. Vol. xxx, pt. 4: 205-242, pl. III)。その p. 230 に *Danaë orientalis* Gorh. として産地を Honshu (Ichiuchi, Kobe, Hyogo)、Kiushu (Nagasaki) とされている。

1939年の中條道夫博士の名著 “日本動物分類・偽瓢虫科” では図説されたが (p. 121-122)、日本特産種とされ G. Lewis 採集の九州産 3 頭によるとされている。同年神谷一男氏はカラー図説をされ分布は本州及び九州とされ新たに隠岐島を加えられた (日本の甲虫、Vol. III, No. 1, pl. 1, fig. 3, p. 2)。

1942年黒佐和義博士は奈良市春日山、神戸市灘区 (六甲山麓、lex., 20-III-1937)、鳥取県大山の産を示された (昆虫界 Vol. x, No. 97, p. 161)。

1980年には佐々治寛之博士が “日本産テントウダマシ科概説” をまとめられ (甲虫ニュース No. 51, p. 2) その中で本種の分布を本州、四国、九州に新たに北海道を加えられた。

原色昆虫大図鑑には中根猛彦博士による図説があり (pl. 107, f. 4, p. 214, 1963) (分布は本州、九州)。ごく新しくは佐々治寛之博士による原色図説がある (原色日本甲虫図鑑 III, pl. 39, f. 12, p. 240-241, 1985)。こちらでは分布を北海道、本州、四国、九州とされている。

比較的分布は広くそれ程珍しい種ではないようだが兵庫県に関しては原記載以後上記黒佐博士の六甲山の記録 (石の下より採集) があるだけでかなり数少ない種の一つになっている。生活史がわかっていないものだから採集することが難しいからだとも思われるが 1986年 5月 16日 三木市の口吉川町、桃坂の北東、八木龍王社に致る途中で叩網で 1 頭採集することが出来た。長期間再発見されていなかっ

ただに大変うれしいと同時にこのあたりでピットホールトラップなどを設置すればさらに或はもっと採集が出来るかとも思ったりしている。とりあえず記録として報告しておく。

(AUG. 1986)

ラミーカミキリ豊岡市上佐野に多産

(兵庫県甲虫相資料・193)

高橋 寿郎

ラミーカミキリ *Paraglenea fortunei* Saunders は既に本州での分布もかなり広がっているし兵庫県下でもほぼ全域に産し極めて普通種になっているので今更分布に関する報告でも無いと思うのだが但馬地域での分布は美方郡、養父郡あたり割合あるが豊岡付近での報告はあまりしらない。僅に日高町阿瀬溪谷での記録はあるが(加野、1982)、恐らくこのあたりにも広く産するのであろうと考えられる。1986年6月19日豊岡市の上佐野で採集する機会を得てその時本種は非常に多くいたので一応報告だけしておきたい。場所は上佐野からかなり西北方へ入った道路ぞいにカラムシが多くありその上に本種が多数発生していた。一応3♂2♀のみ採集しておいたがこのあたりには相当産しているようだった。

尚当日豊岡市の奥岩井で飛翔中のクロホシタマムシ *Ovalisia virgata* (Motschulsky) 1♂を降谷幸雄氏により採集された(標本筆者保管)。こちらも既に高橋 匡氏により豊岡市伊賀谷の記録があるので(1982)(近くでは城崎郡香住からの記録もある。黒沢、1976)別にどうと云うことはなく最近谷角、足立両氏によって(1985)美方郡での記録が多く報じられていたりしているがいつれにしても県下では珍しい種の1つであろう。

(JAN. 1987)

編 集 後 記

- 今年の冬も比較的暖かい冬で助かりました（若干寒の戻りで驚いたりしましたが）。冬は寒いもの夏は暑いものこれが自然だとは思いますが。
- 日本の経済も今迄の花形産業だった鉄鋼・造船が斜陽産業に自動車にしてもそろそろ陰りが見えて来た様です。産業構造が変りつつあるのが良くわかります。内需拡大と云っても自然破壊には充分気をつけてほしいものです。
- 今号もお陰さまでなんとか発行することが出来ました。原稿難は依然深刻です。長・短にかかわらず御投稿を切にお願い致します。次号は11月に御手許にとどけられる様頑張ってみるつもりです。

(T)

きべりはむし 第15巻第1号

昭和62年5月25日発行

発行：兵庫県昆虫同好会

〒652 神戸市兵庫区米室町1丁目44 高橋寿郎方

振替 神戸7-26646

印刷：憐文尚堂

〒652 神戸市兵庫区下沢通3丁目4-11
